

(3) 余暇活動の場を形成するための課題

○ 山の緑とのふれあいの場の形成

大山・日向の森林では、登山道や関東ふれあいの道が整備され、多くの市民や観光客が登山やハイキングに訪れます。また、キャンプ場や日向ふれあい学習センターなどの既存施設も豊富です。しかしながら、登山道等が荒れ、また既存施設も老朽化しており、利用環境は必ずしも良い状況ではありません。また、個々の施設の関連性が薄いことも、課題点として捉えることができます。



関東ふれあいの道

このようなことから、山の緑とのふれあいを高めるために、既存施設の再整備を行うとともに、登山道や遊歩道、また鈴川や日向川の水辺を生かして個々の施設を関連づけ、山の緑とふれあえる余暇空間を形成することが課題となります。

○ レクリエーション拠点となる都市基幹公園等の整備

伊勢原市では、都市規模に対して大規模な都市基幹公園が少ない状況です。また、公園の整備量（市民一人当りの面積 3.4 m²）も十分とは言えません。

現在、都市基幹公園は、伊勢原市総合運動公園が整備されていますが、運動施設が特徴的で市民の多様なレクリエーションニーズに対応しきれていない状況にあります。このため、利用者ニーズにあった施設整備や市民の森ふじやま公園、丸山城址公園など、近隣の既設公園等との相互補完による機能連携によって、多様性のあるレクリエーション拠点の形成を図ることが課題となっています。

また、施設整備状況から、総合的機能を有する鈴川公園と市ノ坪公園は、都市基幹公園の不足を補うものとして、相互連携により一体的に機能させることや、現在整備が進められている県立いせはら塔の山緑地公園は、独立峰からなる山林に位置することから、自然環境との共生を重視するとともに、周辺環境や周辺散策路等とのネットワークづくりが課題となります。

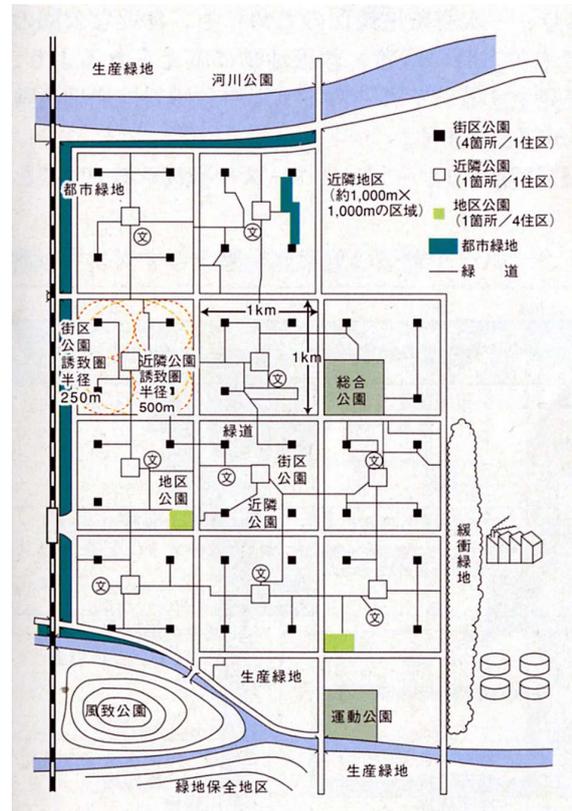
○ 市街化区域における住区基幹公園の整備

伊勢原市では、住区基幹公園は、市民一人当たり 1.9m²と少ない状況にあります。

配置状況についても、街区公園は標準的な誘致圏を満足して市街化区域全域をカバーしているものの、規模・内容は十分とは言えず、遊具等の老朽化も進んでいます。また、近隣公園は数的に不足しています。このことから、子どもの身近な遊び場として、街区公園の改良・改善と近隣公園の整備が課題となります。



公園での遊びはカードゲーム？
広い遊び場を望む小学生たち



都市公園の配置モデル

(資料：緑の基本計画ハンドブック)

○ 市街化調整区域における「レクリエーションの場」の整備

都市公園は市街化区域を中心に整備されるため、市街化調整区域では、不足しがちです。伊勢原市総合運動公園や県立いせはら塔の山緑地公園などの整備や第二東名自動車道の高架下・環境施設帯等の空間利用による公園緑地機能創出の検討が進む「おか」に比べ、「さと」ではこの傾向は顕著です。

このことから、「さと」においては、集落地やその周辺での、公園緑地機能を創出していくことが課題となります。